

「731 部隊」

2017 年 12 月 26 日

「港南台九条の会」は、毎月第 4 土曜日の午前 10 時から、例会を持っている。「平和の語り部」として、集う人々の戦争体験や平和に関する思いを語り合っている。時々、専門家を招き、学習会も開いている。12 月の例会は、731 部隊を中心に、旧日本軍の遺跡を訪ねるツアーに参加した A・K 氏から「悪魔の飽食 731 部隊罪証陳列館を訪ねて」と題する報告を聞いた。731 部隊については、森村誠一氏が著した『悪魔の飽食』が衝撃を与え、一躍知られるようになった。今年の 8 月、「NHKスペシャル」で、ロシアで発掘された資料に基づき、「731 部隊の真実～エリート医学者と人体実験」が放映された。731 部隊が行った恐ろしい事実で驚愕した。A・K 氏の報告とテレビ画面に映し出された生々しい写真に、皆シーンと息を呑んで聞き、見入った。

731 部隊とは、中国ハルビンの南東 70 km の背蔭河に、1933 年に関東軍の防疫班が設立され、それを母体とする「満州第 731 部隊」の隠匿名称で、秘密の細菌兵器実験部隊である。敗戦の 1945 年に撤退したが、遺跡が残っている。6 km 四方の広大な敷地に研究棟、監獄、倉庫などが整然と配備され、中が見えないように壁で囲まれていた。鉄道線路が引き込まれて、近くには飛行場もある。物資の搬入も容易で、日本との行き来も便利であった。千人くらいの日本人がいたようで、家族宿舎、独身宿舎があり、運動場、プール、浴場も完備し、お金の糸目をつけない豪華な住まいであった。

しかし、部隊では極秘に、反人類、反文明、反倫理的な人体実験が行われていた。中国人、ソ連人、朝鮮人を強制的に収容し、彼らを「マルタ」と呼び、名前、職業、年齢などの個人情報と奪い、3 桁の数字をつけ、特別監獄に押し込めた。戦争捕虜、スパイ、労働者、婦人、子ども、赤ん坊までいた。細菌戦の準備と実施のために、ペスト、コレラ、腸チフス、結核など、50 種余りの細菌とウイルスを用いて、生きたままの細菌感染、そして生体解剖、凍傷などの実験と研究を行っていた。彼らの苦痛はいかばかりであったかと胸が痛む。彼らは言葉通りの「生き地獄」を味わった。最高責任者の石井四郎は、視察に来た人に冷笑を浮かべながら、「『ここで仕事をするのは肝が据わってないといけないね。でも気が違っている軍医もいるよ』と言った」という供述もある。1940 年から 1945 年までに、3 千人以上が人体実験で命を奪われ、それ以前の死亡者数は分からない。

第一次世界大戦で、細菌兵器が使用され、むごたらしい戦死者を出した。1925 年のジュネーブ議定書で細菌の使用を禁止する調印が行われたが、日本は無視して、細菌や様々な人体実験を続け、中国で細菌を実際に撒くこともしている。

敗戦が決定的になった時、資料を燃やし、施設を爆破し、関係者はいち早く帰国した。中国は残された資料を捜し、731 部隊の地を「世界遺産」に申請しようと準備中である。A・K 氏は、これらの実情を報告し、写真で建物、遺品などを丁寧に説明してくれた。中国側は、訪ねた日本人を丁重に扱い、豪華なご馳走でもてなした。日本人有志の募金で「謝罪と不戦平和の誓い」の碑が建てられている写真が唯一の慰めであった。

731 部隊の問題の核心は、大規模で広範囲な人体実験をした日本に責任があるということである。もう一つの問題は、関係した医学者たちが持ち帰った医学資料を米国に渡すことによって、彼らを免責し、事件を隠蔽したことである。このことの罪は大きい。米国は資料を基礎にして、細菌研究を積み上げていった訳で、米国も同罪と言わねばならない。医学者たちは罪を問われず、戦後、大学教授になり、医薬研究所の役職についている。日本と米国の間で闇取引した権力の横暴を見るが、断じて許せないと思っている。